Discussion Paper No.293

中国におけるマルクス経済学の研究

－回顧と現状－

雲南財経大学　　中国社会科学院

薛宇峰　　李暁魁

December 2017

INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH
Chuo University
Tokyo, Japan

中国におけるマルクス経済学の研究

－回顧と現状－

Marxian Economics in China

−Prospective and Retrospective Studies−

薛宇峰（雲南財経大学）、李暁魁（中国社会科学院）
Xue Yufeng (Yunnan University of Finance and Economics),
Li Xiaokui (Chinese Academy of Social Sciences)

1. 中国マルクス経済学の発展と刷新

20 世紀 90 年代中後期、中国の経済界で「中国の経済学はどこに行くのか」という理論的論争が行われたことがあった。マルクス経済学と西側経済学の関係をめぐって、学術的な立場から、中国の経済学理論の発展方向と研究規範といった一連の基本的理念と原則について、激しい議論が展開されたのである。ある同志は、「西側経済学と区別される、概念的にも体系的にもまったく異なる中国的経済学を構築する」ことに賛成せず、逆に「資源配分の全過程」を反映する現代経済学のパラダイムの導入を主張した（董補祓、1997 年。魏傑、1997 年）。あるいは、ある同志は、世界三大理論体系の相補的「マルクス主義の新統合」に着目するが、必ずしも「マルクス主義理論自体の発展と改造」を前提としたり、かつ新体系の構築を主張したりすることは必要ないのであって、その理由は「スミスの理論体系が当初すでにこの仕事を完成させた」からだとしている（樊綱、1988）[1]。一方、程恩富教授、劉国光教授、衛興華教授、林崗教授および張宇教授などは、「マルクス主義経済学を基礎とし、西側経済学を利用する」中国の主流経済学パラダイムを建て直すべきであると強調した。

われわれがすでに知っているように、ある研究パラダイムの特色は、その研究の理論的視

[1] 顔鵬飛「中国経済学は果たしてどこへの行くのか」、『毛沢東鄧小平理論研究』所収、2005 年 9 月号。

座、前提とする仮説、基礎的方法論および研究範囲によって表明され、またそれによって、おのおのの経済学の学派に独特の研究分析方法や理論的結論が決まってくるものである。経済思想史の変遷から見れば、およそ新しい経済学理論は、既存の理論体系では直面する経済的現象や経済的矛盾が解釈できない状況において生まれるものである。完全なる理論体系を形成し樹立することは、中国的マルクス経済学を発展させ刷新する中で、もっとも挑戦的で重要な課題である。研究対象の変化は現実的な経済要素の変化によるものであり、中国の経済学理論体系を発展させ刷新することは、当然のことながら、中国的特色のある社会主義市場経済の運行と発展を研究対象とする。

そのことは、経済のグローバル化、または中国的特色のある社会主義市場経済の建設という背景のもとで、マルクス経済学の基礎的原理に対する理解を深め、マルクス経済学理論体系を完成させ、マルクス経済学についての偏見と誤解を明確に正すことである。客観的な歴史的要素を背景にした理論の制限を乗り越え、マルクス経済学の指導的地位を堅持して、「左派的」または「右派的」教条主義を批判し、マルクス経済学と西側経済学の相互関係を明示し、中国的特色のある社会主義市場経済という条件のもとにおける現代の政治経済学を一層発展させ創新させることである。それは、疑いもなく、重要な理論的実践的意義を持っている。科学的発展を時とともに歩む態度をもって、マルクス経済学を発展させ、新しいマルクス経済学を創り出さなければならない。経済のグローバル化に対応し、中国的特色のある社会主義市場経済の建設に必要な現代的政治経済学理論体系を構築して、真に中国の経済学的範疇や法則、理論体系の理論的基礎とし、応用経済学の理論的スタートを切らなければならない。そのためには、真剣かつ深刻な反省を行い、本質的かつ持続的な理論的創新を行うことが急務である。

21 世紀に入ってから、創新と現代化は中国のマルクス経済学の発展の方向を指し示す基本

的な方法と大きな趨勢となっている。実践を第一に、マルクス主義の基本的法則を中国の実情と結合させ、マルクス主義の発展と現代のマルクス主義の創新からあらゆる優れた成果を吸収する覚悟で臨めば、マルクス経済学は創造的進化を遂げることができるだけでなく、マルクス経済学の現代化も必ずや実現できるはずである。

しかし、これまで、中国の経済学諸学派が議論を重ね、さまざまな考えを示してきたのは、主として、労働価値論に対する理解と評価、あるいは中国的社会主義市場経済理論の「パラダイム」をいかに構築するかをめぐってであった。何煉成教授は、「中国の経済学はどこへ行くのか」という議論に含まれるさまざまな問題について、次のように指摘している。改革開放以来の 30 年間を振り返ってみると、わが国の経済学界は、この問題を絶えず研究し、段階的な成果をあげてきた。一つは、20 世紀 80 年代の初めに、先輩のマルクス主義経済学者である許滌新氏、孫冶方氏が「社会主義制度下における生産、流通と分配」(『社会主義経済論』)を発表し、80 年代から 90 年代にはいわゆる「南方本」「北方本」「教育委員会本」といったものが現れ、新世紀に入ってからは逢錦聚、林崗、張宇ら諸教授が編纂した政治経済学の教科書が現れ、さらに、現在では『現代政治経済学創新』(程恩富教授監修) が出版されている。まさに、「長江は後の波が前の波を押し進める（长江后浪推前浪)」の譬えのように、新しい世代が前の世代を促して新陳代謝を進め、世の中はたえず前進していくのである [2]。

とくに、程恩富教授の監修する『数理政治経済学研究叢書』および『現代政治経済学教材シリーズ』(初級、中級と上級の 3 巻、上海財経大学出版社)、林崗と張宇教授の監修する『当代政治経済学研究叢書』と張宇教授らの監修する『高級政治経済学』(中国人民大学出版社) は、多角的、学際的、包括的立場に立って、中国独自の特色のある社会主義市場経済における経済学理論体系の創造的発展について、深みのある研究を行なっている。経済理論に対す

[2] 何煉成「『中国の経済学はどこへ行くのか』の三点を論ずる」『人文雑誌』、2008 年 1 月号。

る包括的な統合を通じて、近年の学術界や理論分野で大いに注目され、力を込めて議論され、また中国の経済改革と移行経済を困惑させてきた重大な問題について、全面的で十分な説明と解釈を行なっている。これらの著作は観点が鮮明であり、方法が科学的であり、解析が徹底しており、論証が十分に論理的であり、今後さらなる研究を展開していくための貴重な示唆と重要な資源を提供してくれており、きわめて重要な理論的価値と実践的意義を持っている。

同時に、これらの著作の出版は中国マルクス経済学の創造的発展過程において、学問的三大学派の形成と樹立を示している。およそ学派または潮流とは、国や都市あるいは有名な学府を思想と主張の集まる中心地または土台とする。たとえば、経済学史上では有名なオーストリア学派、ケンブリッジ学派、シガゴ学派などがあった。中国が改革開放を実行するこの特別に偉大な転換期にあたり、歴史は学問の創造的発展を呼びかけているし、新たな学問的潮流の誕生を待ち構えている。中国の改革開放がさらなる本格的な発展を遂げるにつれて、中国の経済社会に大きな変化が生じるだろう。それゆえ、こうした変化に対する新たな理論的総括と解釈を行なうことが、中国の経済学や中国の経済学者に差し迫って求められているのである。

2. 中国におけるマルクス経済学の三大学派

経済学の学派または経済思想の潮流とは、人類社会の基本的経済問題または一定の時期に重要な経済的課題に対して、比較的に一致した立場や主張を持った経済学者によって形成された結束力のゆるい集団であったり、または経済学者らが同じ先駆者や理論的指導者の理論を踏まえて発展させてきた経済学の理論体系であったりする。したがって、ある経済学の「学派」と、この学派のメンバーが信奉する「学説」または「主義」とを同義語とみなすことが

できるし、それらの言葉を置き換えて使うことができる[3]。いわゆる学派とは、共通の学術的伝統を持ち合わせたり、または共通の経済的用語を用いて推論したり交流したりして形成された「言語共同体」のことである。

マルクス経済学は、社会的経済関係が発展し変化する過程の中で、さまざまな経済学の学派や思潮と対決し、対話を繰り返す中で発展してきた。また、人類史的視野に立って文明発展のあらゆる物質的成果と精神的成果を広く吸収した上で、時代の要請にしっかりと応えつつ、たえず理論の創造的発展を推し進めてきた。そこには、大きな理論的魅力と広大な発展的空間が用意されている。経済学の学派には、学派ごとに理論体系や立場と主張に特徴があるため、一定の基準をもってそれぞれの学派を区分することができる。もちろん、経済学者の理論的傾向の違いを厳格に区別したりするのは難しいことではあるが、彼らの政治的立場や学問的主張、そして研究方法などによって、大まかにいくつかの理論的学派または学術的潮流に区分けすることができる。現代中国のマルクス経済学の諸潮流を研究することによって、これらの学派または学説の形成および発展過程と基本的内容をよりいっそう深く認識できるようになるだけでなく、さらに現代中国のマルクス経済学の変化と発展の方向性をより深く理解できるようになるだろう。

中国の問題を研究するには、中国の経済理論を用いて解釈しなければならないし、中国の経済理論はまた中国の現実と直面してこそ発展させていけるものである。理論経済学を繁栄させ発展させるためには、さまざまに異なる学派を創設する必要があるし、マルクス経済学の中でも、それぞれの学派を樹立すべきである。これこそ学術の繁栄を示す重要なシンボルの一つである。したがって、中国のマルクス経済学の創造的発展を実現するためには、中国におけるマルクス経済学内部に存在するそれぞれの流派や学説の起源と歴史、そして観点と

[3] 方福前、「『硬核ハードコア』と『保护带保護ゾーン』による経済学流派の区分」『中国人民大学学報』、2004 年第 1 号。

方法論および理論体系に目を向けることが必要である。

（１）正統派マルクス経済学の創新的学派

中国人民大学の衛興華教授や、林崗教授、張宇教授はこの学派におけるリーダー格の人物である。彼らは政治経済学を創造的に発展させていくに際し、マルクス主義の立場と観点と方法に厳格に従い、いくつかの基本的法則を堅持することを求めている。一、生産関係は生産力により決定されるし、上部構造は経済的基盤により決定されるという唯物史観が、マルクス経済学の分析パラダイムの基礎を成す。二、階級性と科学性の統一は、マルクス経済学の本質である。三、労働価値論と剰余価値論は、マルクス経済学を支える柱である。この柱がないがしろにされると、マルクス経済学が崩壊する。四、公有制と労働に応じた分配を旨として共同富裕の道を歩むことは、中国の特色のある社会主義の経済的基礎であり、改革開放を実行する際に堅持しなければならない原則である。この根本的原則を放棄してしまうと、必然的に社会主義制度の崩壊という結果をもたらすことになる。五、社会主義の基本制度と市場経済の結合は、社会主義市場経済の核心であり、中国の経済体制の改革という歴史的過程を支える中心的一環であり重要な手がかりである。六、工業化、市場化と社会主義の憲法制度との有機的統一を図る中で、中国の漸進的改革と経済モデルの転換に内在する論理を把握しなければならない。マルクス経済学の現代的様式は、現代の経済生活の客観的運動法則を科学的に反映したものであるため、新しい現象を説明し、新しい問題に答え、新しい法則を示さなければならないし、新たな主題、概念、範疇と理論的観点を持っていなければならない、と彼らは考えている。

上述したような基礎と前提の下で、マルクス経済学の方法論を五つの基本的命題に総括すべきであると、彼らは提起し、またそれを主張している。すなわち、生産力と生産関係との矛盾から社会の経済制度の変遷を説明すること、歴史的に形成された社会的経済構造の制約

の中で個体の経済行為を分析すること、生産手段の所有制に基づいて経済制度全体の性質を決定すること、経済的諸関係に基づいて政治や法律制度および倫理規範を理解すること、社会実践によって社会経済発展の規則性と意図の統一を実現すること。この五つの基本的命題はマルクス経済学の「ハードコア」を成している。経済分析を試みる場合、この五つの命題に則って、それを堅持することと発展させることとを統一すれば、新しい歴史的条件に適応したマルクス経済学の現代的様式を作りだすことができる。マルクス経済学の堅持を強調することは、根本的に言うと、唯物史観に基づくパラダイム分析、理論的枠組みまたは方法論を堅持することであって、ある具体的な観点や理論を堅持することではない。同様に、マルクス主義を発展させることは、また唯物史観に基づく分析パラダイム、理論的枠組みまたは方法論を発展させることであって、ある具体的な観点や理論を発展させるだけではない。

この学派の学者は次のように主張する。すなわち、マルクス主義を一つの科学的世界観または方法論として理解してこそ、マルクス主義の魂を掴み取って、複雑で急速に変化する世界において、マルクス主義の旺盛な生命力と創造力を体験し、また発揚して、新しい歴史的条件に適応したマルクス経済学の新たな形式を発展させることができる。そして、彼らはまた次のように考える。新世紀に入って、マルクス経済学は、かつてなかったチャレンジに遭遇したし、それがまた大きなチャンスに転じたことでもあった。マルクス主義経済学を発展させていくために直面する主な任務は、およそ二つにまとめられる。すなわち、中国化と現代化の二つである。マルクス主義経済学の中国化とは、マルクス経済学の基本理論と中国の実践と結び付けて、さらにその中でマルクス経済学をたえず豊かにし発展させていく過程である。そしてマルクス経済学の現代化とは、マルクス主義経済学の基本的理論を現代社会経済発展の実際と結び付け、さらにその中でマルクス経済学をたえず豊かに発展させていく過程である。

中国の特色のある社会主義経済理論を発展させるためには、西側の経済理論およびあらゆる人類文明の優れた成果を正しく借用し、かつ広く吸収する必要性を、この学派の学者はとりわけ強調している。彼らは次のように主張している。西側の経済理論を決して鵜呑みにしてはならない。マルクス主義理論に基づき、かつ中国の現実から出発して、その中の誤った非科学的な部分を切り捨て、有用な合理的な部分を借用し、吸収しなければならない。彼らは次のことを固く主張する。中国の特色のある社会主義経済理論体系はマルクス主義を指導原理とすること、中国の特色のある社会主義経済の発展の実践を代表し、かつ中国の特色のある社会主義建設に奉仕すること、広範な人民大衆の根本的利益の側に立つこと、西側経済学およびあらゆる人類文明の優れた成果を正しく借用し、かつ広く吸収すること、中国的特色、中国的風格、中国的気概を持った経済理論であること。この学派には、呉易風教授や楊志教授、邱海平教授といった多くの学者が属している。

（２）新マルクス経済学総合学派

経済学の現代化を達成するためには、マルクス経済学の方法、仮説、原理の面における学問的創造性を高めなければならない。現代のマルクス経済学は理論の仮説と研究方法の現実性、科学性および弁証性を強調するため、より大きな理論的認知効用と社会建設効用を備えている。新マルクス経済学総合学派の創設者である程恩富教授は雑誌『中国社会科学』に発表した論文「現代マルクス主義政治経済学の四大理論仮説」において、現代マルクス経済学は理論構成のレベルに入り込んでその基本的思想を確立し、さらに論理的叙述を展開しなければならないと述べ、現代マルクス経済学は理論構成の現実性、科学性、弁証性を重視していることを強調した。また、程恩富教授は、現代マルクス経済学の理論的創造性を発揮すべく、「新しい生きた労働の価値創造理論」や「利己的利他的経済人論」「資源と需要の相互制約理論」「公平と効率の相互促進による同一方向変動理論」などを理論的仮説とみなすよう独

創的に提起して、さらに詳細に全面的な論証を行なった。主な仮説理論とコア理論における科学性と普遍性のあるマルクス主義および経済学こそ、中国化または本土化を超えて、真に中国の特色のある社会主義市場経済の建設発展を促すことができる、と強調した。方興起教授もかつて次のように指摘した。マルクス主義の古典の作者が、一定の歴史的条件のもとで提起した経済原理と、目下の重要な経済理論的問題について、程恩富教授は理論仮説という形で検討している。これは、マルクスの研究方法に相応しいばかりでなく、マルクス経済学に明らかな実践的特色、民族的特色および時代的特色を与え、よって学科体系、学問的観点そして科学的研究方法の創新を推進した[4]。

わが国の経済学教育と研究は、現代社会主義経済のグローバル化や市場経済の科学的発展の必要性に応えなければならないし、歴史の継続のなかで絶えず自主的な総合と革新の過程を完成させなければならない。これが新マルクス経済学総合学派の問題提起である。彼らは「世情を鑑とし、国情を拠り所とし、マルクスの学説を基本理論とし、西側の学説を用いる国学を根本として、総合的革新を行なう」べきであると主張する。また、中国の経済学の現代化は、マルクス主義の科学的知識を根本原理または指導原理とし（政治経済学にとっては根本原理とすべきであり、他の大多数の経済学科と社会科学にとっては指導原理とすべき）、西側の非マルクス主義の科学知識と合理的要素を取り入れ、国学を発想の源泉として、持続的で総合的な革新と理論的克服に努めるべきである、と彼らは考えている。

疑いもなく、マルクス経済学の進歩はかなりの程度まで方法論の進歩に依存するところが大きい。そのため、種々の伝統的または最新の経済学方法論を運用して経済実践について理論的総括を行なうことは、現代中国の経済学を構築していく上で避けて通れない道である。新マルクス経済学総合学派は変革を志す現代マルクス経済学派として、マルクス経済学とソ

[4] 方興起「マルクス主義経済学における理論仮説」『中国社会科学』、2008 年第 2 号。

連経済学をつとめて乗り越えようと努力しながら、また現代の西側経済学と中国や外国の近代経済学をも乗り越えようと努力している。これは総合的刷新という時代の精神と科学的理念を表している。程恩富教授監修『経済学方法論――マルクス、西側主流および学際的視点』から分かるように、この学派は、伝統的な研究方法にまつわる一部の制限を打ち破り、マルクス経済学方法論を新たに書き直し、また掘り下げようとしている。この点において、この学派は、西側経済学の方法論に関する科学的評価に積極的であり、関係する社会科学と自然科学の利用可能な知識を幅広く取り入れる点でも前向きである。

何煉成教授は、新マルクス経済学総合学派の重要な著作『現代政治経済学の創新』（程恩富教授監修）の「方法論」編について、次のように述べている。この編は本書の中でもっとも良く書けている部分である。第一に、マルクス主義の基本的方法論を堅持し、唯物史観と弁証論の基本的方法論に従いつつ、弁証法的論理と階級分析法といった方法論を強調している。第二に、経済学の二つの次元、すなわち本質的経済と表象的経済とを区分することを初めて提唱し、本質的経済学の重要な意味と基礎的役割を強調している。これはわが国の現段階の経済学界が応用経済学のみを重視し、本質的経済学を疎かにする偏向に対して、貴重な示唆を与えたものである。第三に、「経済学の理論的分野、すなわち労働価値説と生産要素価値説」を明確に提起した。これは本来、エンゲルスが『反デューリング論』で、価値説は「経済学の諸体系の真価を見きわめるための試金石である」と指摘したものだが、もはや人々に忘れられてしまったため、本書がこの点をあらためて強調した意義は言うまでもなく大きい。第四に、「経済学の研究方法にあるいくつかの問題点について」という文章において、「研究対象：現実の具体性」――「研究結果：思考の具体性」――「研究過程：現実の具体性から思惟の具体性へ」――「記述方法：思考の具体性の再現」だと指摘した。これは、マルクス『資本論』の方法、すなわち「研究から言えば具体から抽象へ、記述から言えば抽象から具体へ」

についての具体的で生き生きとした表現であり、理論経済学の研究と論証のどちらにとっても妥当するものである。第五、「上海派経済学方法論：総合的創新に関する若干の思考」という文章の中で、五つの方面にわけて方法論的問題を提起した。いずれも経済学界がこれまでともすれば忘れがちであった方法論上の問題であり、十分に取り組み、活用するにふさわしい問題点である[5]。

新マルクス経済学総合学派は、一方では、中国の政治経済学のモデル転換を主張する。それは伝統的な政治経済学から現代の西側経済学への転換ではなく、科学的継承と、ソ連型経済学や現代の西側経済学を超克した上での現代的な政治経済学への転換だと主張する。そこには現代社会主義市場経済と現代資本主義市場経済の基本理論が含まれている。一方では、それと同時に、中国の理論経済学を繁栄し発展させていくための、「既存の成果を継承し、中国の現実に直面する」営為が必要である。現代中国のマルクス経済学も、現代の西側のさまざまな経済学流派も、その卓抜した成果を選択的に科学的に継承しなければならない。彼らはそう主張する。この学派の主たる指導的人物には、ほかに上海財経大学の馮金華教授と馬艶教授がいる。この学派の者と同じ考えを持った学者には、復旦大学の顧鈺民教授や南京財経大学の何乾強教授らがいる。

（３）マルクス主義建国門学派

マルクス主義建国門学派（略称「建国門学派」）とは、中国社会科学院マルクス主義研究院に所属、マルクス主義原理研究部主任を担当する余斌研究員の提唱（2016．10）によって形成されたものである。学派メンバーは当研究院の過去・現在の学習者、研究者がほとんどである。最も科学的な視点で、マルクス主義理論の勉学、研究、活用をするのが目的である。マルクス主義の古典的な著作の理論に基づき、理論の一体性とロジックの一貫性を強調し、

[5] 何煉成「『中国の経済学はどこへ行くのか』の三点を論ずる」『人文雑誌』、2008 年 1 月号。

対立論調を断固たる反論で対応するのが特徴である。マルクス主義基本的理論に基づき、数学を活用しながら研究活動を展開し、西側の数理マルクス主義に対するマルクス学派からの批判に反撃する。

マルクス政治経済学（ポリティカル エコノミー）における研究について、「建国門学派」は弁証法的労働価値説と剰余価値説を主張し、社会的必要労働の弁証的変化を提出し、資本主義の基本的矛盾が剰余の追求であると指摘している。また、G-W-G'と異なる資本主義経済の本質的形式を提出し、マーケティングこそ資本主義経済の根本だと主張している。マルクス的な「価値の転換」理論への疑義を批判し、価値転換の問題を解決し、平均利潤率低下傾向の数学計算モデルを提出した。中米貿易輸出超過現象、米国金融危機間のドル評価、世界経済景気回復の低速問題など、マルクス主義という視点で独特な解釈がある。さらに、新帝国主義理論を提出し、新帝国主義が資本主義と帝国主義発展の最後の段階であると指摘し、その主な特徴と方式を説明した。中国的特色のある社会主義市場経済において、市場経済の形成原因や中国経済の新常態（ニューノーマル）を説明した[6]。

３．中国におけるマルクス経済学研究の現状

2008 年に先進資本主義諸国で金融経済危機が勃発し、それ以降、中国における政治経済学の理論研究と学科建設は新しい発展のチャンスを迎えた。中国の政治経済学の発展と創新をいっそう促し、重要かつ現実的な経済課題に対する研究を推し進めて、中国の経済改革と経済発展によりいっそう奉仕させるため、張宇教授や邱海平教授をはじめとする研究グループは、2010 年から中国における政治経済学の年度別発展報告を発表し始めた。報告は、テーマ別に分かれており、各年度の中国の政治経済学研究に関する主な新しい成果や進捗状況をま

[6] 余斌著『微观经济学批判』，中国经济出版社 2004 年 4 月版。（修订版）东方出版社 2014 年 1 月版。
余斌著『〈资本论〉正义——怎样理解资本主义』，广西人民出版社 2014 年 12 月版。
余斌著『45 个十分钟读懂〈资本论〉』，东方出版社 2011 年 12 月版。（日文译本『さぁ『資本論』を読んでみょう』，出版社：こぶし書房，ISBN 978-4-87559-286-0，2014 年）
王佳菲著『揭开经济危机的底牌——透过〈资本论〉看新危机时代』，新华出版社 2010 年 1 月版。

とめた上で、さまざまな問題の存在や進展の可能性などを指摘している。彼らは次のように考え、また強調している。近年の理論経済学全体の学術研究と思想状況をみた場合、一方では、経済学の大部分の研究はなお既存の伝統を継続しているが、もう一方では、中国の経済学研究の全体的な構成と人々の思想的認識に重要な変化と転換が生じつつある。それは主に以下の三点に表れている。第一に、西側経済学を盲目的に信奉したり推賞したりする風潮は反省されつつある。第二に、政治経済学の研究が一段と活性化し、多くの理論研究分野に顕著な進展がみられる。第三に、中国的特色、中国的風格、中国的気概のある中国経済学を創造することが中国の経済学者の共同認識と共通目標となりつつある。以下、中国のマルクス経済学研究の状況を総括的かつ簡潔に紹介してみたい。

2010 年 1 月、『政治経済学評論』を創刊する際、中国政治経済学界の一部の有名な学者らは、「新しい歴史的スタートに立って中国の政治経済学を進める」をテーマに特集号を組み、おのおのの意見を発表した [7]。その中で、洪遠朋氏は、マルクス主義政治経済学を正しく扱うためには、一、堅持すること、二、間違いを正すこと、三、発展させることの必要性を指摘した。呉易風氏は、西側経済学を正しく取捨選択するには、その二面性を冷静に見極める必要がある。すなわち、一、階級性、二、一定の条件に基づいたある種の実用主義的性格。また、程恩富氏はマルクス経済学が現代化していく中で、科学的発展様態を呈しており、それは五つの点に現れていると強調した。一、重大な現実的な経済課題の研究が重視されるようになったこと。それに関し、科学的発展観を十分に体現できる理論的、政策的探求が行なわれるようになったこと。二、経済学原理の超越的発展を重視するようになったこと。三、政治経済学理論の数理学的表現と分析が重視されるようになったこと。四、現代政治経済学が応用経済学の発展と創新の引率者としての役割を担うようになってきたこと。五、国外の

[7] 宋涛ほか「新しい歴史的スタート時点に立って中国の政治経済学を進める」（合計 14 本の論文が収入されている）、『政治経済学評論』所収、2010 年第 1 号。

マルクス主義経済学との相互交流や経験を学び合うようになってきたこと。林崗氏は、新しい時期において中国の政治経済学を発展させていくためには、次の点を把握しておくべきだとはっきり指摘した。一、マルクス経済学の方法論を堅持すること。二、マルクス経済学の基本理論についての研究を深めること。三、マルクス経済学の現代化を推進すること。四、広範な人民大衆の根本的利益の代弁者としての立場を堅持すること。五、西側経済学を正しく取捨選択すること。六、経済史および経済思想史の研究と教授を重んじること。七、国際化を強化するなかで中国的特徴と民族的気質を押し広げること。以上のような観点は、疑いもなく、新しい時代を迎え、中国の政治経済学をよりいっそう推進していくために、きわめて示唆的意味をもっているのである。

2012 年、中国の特色のある社会主義経済学体系と学問的発信体系を構築することが、ますます中国の経済学界の共通認識となりつつあるため、12 月 9 日、『政治経済学評論』編集部は「シンポジウム・中国的経済学の学問的発信体系を構築する」を主催した。このシンポジウムで、政治経済学という言葉自体に発信権という意味が含まれているため、マルクス経済学と西側経済学との関係を適切に処理し、西側のマルクス主義に対してはっきりとした一線を引かねばならない、と胡鈞氏は指摘した。顧海良氏の考えは次のようである。すなわち、中国的経済学の学問的発信体系の核心は、中国の特色のある社会主義経済学理論である、この理論は科学的社会主義の基本法則を堅持しながら、時代に即した中国的特色を持ち合わせている。さらに、洪銀興氏は、中国の特色のある社会主義経済学はマルクス主義経済学の中国化、現代化であり、その理論的基礎と根本的法則はマルクス主義の古典的作家によって打ち出されたものだと強調した。劉燦氏は、中国の経済学教育はマルクス主義を指導原理とし、中国的経済学の学問的発信体系を人材養成の各部分の中に浸透させて、中国の経済学の教育システムを構築すべきであると主張した。また、許建康氏は、新しい時代における中国経済

学の学問的発信体系にまつわる争いで、目だっているのは、中国の特色のある社会主義理論の堅持と発展を主張する人たちと、旗印を改めて、西側の邪道に足並みをそろえようと主張する人たちとの対立だと見ている。

経済学の創新と中国的経済学理論体系の創設をめぐって、長期にわたってマルクス経済学研究に携わってきた一部の中国の有名学者の新しい成果が注目されている。たとえば、『財産権の理論と実践』という著書において、呉易風教授は、マルクス主義の財産権理論と西側の財産権理論とを体系的にまとめ、比較研究を行なった。その上、わが国の国有企業改革が基づくべき法則と道筋について政策面から提案を提起した[8]。『当面の金融危機と経済危機を背景にした西側経済思潮の新しい動向』という本の中で、呉易風教授は、当面の危機の原因、進行過程およびその根源を分析することを通じて、西側経済学に対する鋭い問題提起とマルクス経済学に対する再認識とを行い、西側の経済思潮の新しい動向について分析と評論とを行なった[9]。洪遠朋教授はマルクス経済学の基本原理およその発展を系統的に論述した上に、社会主義の基本的任務、資本の問題、剰余価値の問題、地租の問題および経済循環といった重大な理論問題について追究し、かつ中国の特色のある社会主義経済学の構築という「新思考」を提起したのである[10]。経済科学出版社から出された『呉宣恭文集』は経済理論に関する呉宣恭教授のもっとも代表的な研究成果を集めたものである。収録された論文 78 本は、20 世紀の 80 年代初期から今日に至るまでのものであり、ある角度から改革開放以降、中国におけるマルクス経済学の発展的道のりと進捗状況を表わしている[11]。何自力監修『高級政治経済学――マルクス経済学の発展と創新を探る』は、マルクス主義経済学の基本理論体系を堅持するという前提のもとで、現実への対決を重んじ、価値論や、グローバル化、経済危

[8] 呉易風『当面の金融危機と経済危機を背景にした西側経済思潮の新しい動向』、（北京）中国経済出版社、2010 年。
[9] 呉易風、関雪凌『財産権の理論と実践』、（北京）中国人民大学出版社、2010 年。
[10] 洪遠朋『マルクス政治経済学論評』、（北京）経済科学出版社、2010 年。
[11] 呉宣恭『呉宣恭文集』、（北京）経済科学出版社、2010 年。

機、就業、分配、また労使関係、環境問題、国家論といったもろもろの理論上の焦点について探求を行なった[12]。また、上海財経大学出版社からは程恩富監修『現代政治経済学教材シリーズ』が出版されている。この教材シリーズは、『現代政治経済学新編』『中級現代政治経済学』『高級現代政治経済学』の三冊から成り立っており、それぞれ大学本科、大学院修士課程および博士課程の教育の需要に即して編集されている。これは今まで、中国国内で出版された最初の、充実した内容の、読者対象を明確にした政治経済学教材シリーズであり、中国の経済学理論体系と教育体系を創立するための最新成果である。林崗教授らが監修した『「資本論」と中国特色のある社会主義経済――「当代経済研究」創刊 20 周年記念文集』は、20 年間『当代経済研究』で発表した代表的な論文 64 編を選び取り、『資本論』研究の視点から、政治経済学の研究対象や研究方法、そしてマルクス主義の基本原理と中国の特色のある社会主義経済に関するさまざまな問題について、大量の、また多彩な視点から掘り下げた研究討論を行ない、比較的広範囲にわたる過去 20 年間の中国政治経済学研究の発展過程と研究成果を反映した好著である[13]。

張宇氏は、八つの面から『資本論』研究と学習の当代的意義を述べている。『資本論』はマルクス主義哲学、政治経済学と科学的社会主義をつなげる絆として、マルクス主義理論体系の重要な礎石である。同時に、『資本論』は弁証法と唯物史観を利用した具体的事例の表れである。労働過程と資本主義的市場経済の研究において、『資本論』は社会的諸生産と市場経済の法則を明らかにしている。剰余価値論を中心に、『資本論』は資本主義経済の活動法則と歴史的趨勢を明らかにしている。資本主義の発展趨勢についての研究では、『資本論』は共産主義の未来社会の基本的特徴を探り、中国の特色のある社会主義の発展に全体的な指針を提示

[12] 何自力『高級政治経済学――マルクス主義経済学の発展と創新を探る』、（北京）経済管理出版社、2010 年。
[13] 林崗ほか監修『「資本論」と中国特色のある社会主義経済――「当代経済研究」創刊 20 周年記念文集』、（長春）吉林大学出版社、2010 年。

した。また、『資本論』はマルクス主義の百科全書として、哲学、政治、法律、歴史、宗教などの各分野においても、マルクスの貴重な思想を表わしている。中国の経済学の発展は、マルクス主義を指導原理とし、『資本論』を重要な基礎文献として遂行されなければならない[14]。張宇教授はまた、論文「中国的経済学体系と学問的発信体系の構築についての思考」の中で、理論と実践の関係という視点から、中国的経済学理論体系と学問的発信体系の構築について、その現実性および実行可能性を論証し、さらに建設的な提案を行っている。そして、邱海平教授はある論文のなかで次のように指摘している。中国の政治経済学の研究方法に存在する一つの重大な欠陥は、唯物史観が内包しているさまざまな内容を科学的に区分けしていないことである。すなわち唯物史観の基本的方法を堅持することと、その中の個々の結論を鵜呑みにすることとを混同したがために、理論と中国の実際との間に矛盾を引き起こしたのである。したがって、近代以来の世界全体を背景と出発点に据えて、国家を中国の政治経済学の起点範疇と確立し、さらに、生産関係と生産力の関係、国家と市場の関係、各種の所有制の関係といった重大な課題について、新たな解釈を行なわなければならないのである。これこそが中国の政治経済学の一つの創新の論点なのである。このほか、中国の政治経済学研究は、方法論上の教条主義と形式上の非規範的といった主な弱みをさらに克服しなければならない[15]。「新しい歴史の分水嶺に遭遇する経済学」という論文において、邱海平教授は現代世界経済の全体的情勢から出発して、経済学理論を創造的に発展させる必要性と基本的法則を論証した。

マルクス経済学の進化を信奉する中国の学者は、進化経済学の新しい成果を積極的に参考すべきであり、よってマルクス経済学と進化経済学の科学的統合を実現させるべきである。

---

[14] 張宇「『資本論』の当代的意義」、『政治経済学評論』所収、2011 年第 4 号。
[15] 邱海平「中国政治経済学の創新および論理的起点――現代中国史における唯物史観の適応性についての一思考」、『教学と研究』所収、2010 年 3 月号。「中国の政治経済学研究における主たる欠陥とその進路」、『マルクス主義研究』所収、2010 年 6 月号。

これはマルクス主義経済学の創新的研究の重要課題だと、彼らは強調する。本体論と認識論とに基づいて、進化経済学はマルクスの抽象方法をきわめて重んじなければならない。この抽象は現実に対する抽象と、個別の事物に対する抽象であって、それに基づいて経済の法則に対して一定の解釈を提起することが必要であると彼らは主張する。彼らは実証主義的な数学演繹法に反対し、遡及的、比較的、制度的、歴史的、解釈学的研究法を強調する。進化経済学の角度から見れば、マルクス主義経済学の研究には、今なお二つの理論的誤解が存在していると彼らは考えている。すなわち、一、史的唯物論を簡略化的、機械論的、還元論的、決定論的に理解すること。二、一般均衡からスタートしてマルクス主義経済学の研究を試みること[16]。進化経済学がとりわけ強調しているのは、マルクス経済学パラダイムの「ハードコア」な部分、すなわち史的唯物論、およびマルクスのその経済学研究対象に対する定義の部分は、進化経済学の強調する本体論的法則と相容れないものではない。彼らは、西側の異端経済学の流派はもろもろあるが、それらを基本的にマルクス経済学と非マルクス経済学とに分けることができる、と考えている。しかし、まさにこれらの学者が総括したように、西側のマルクス経済学が融合していく方向は次の二種類にまとめられる。一つは、新古典派主流経済学の研究方法と研究道具の正確性を認め、ゲーム理論、数学のモデリングといった主流経済学の分析法を利用してマルクス経済学を改め、よってマルクス経済学の新古典化を実現しようという試みである。もう一つは、伝統的なマルクス主義の西側主流経済学批判を受け継ぎながら、非マルクス主義の西側の異端経済学諸流派とのつながりや対話を強め、よって旧制度主義といった異端経済学の思想と方法をマルクス経済学と結びつけて、マルクス経済学に対して創造的組み換えを果たそうという試みである。しかし、労働価値論と剰余価値論を柱とし、唯物史観と弁証法を方法論とするマルクス経済学について、創造的転化を真に

[16] 馬国旺「進化経済学パラダイムとマルクス主義経済学研究方法の新しい方向」、『理論と現代化』所収、2008 年第 2 号。

実現することは、決して生易しいことではなく、なお道は遠い。

もう一方で、最近十数年にわたるマルクス経済学の数理研究の成果を総観して気づくことがある。すなわち、中国のマルクス主義経済学者は、数理論理を用いてマルクス経済理論を叙述し発展させていく上で歓迎すべき成果を達成した。マルクス経済学の創新を目指す独自の流れがここに形成され始めた。従来のマルクス経済学のテキストを基本的な枠組みと手本とする表現体系から、現代マルクス経済学の数理論理体系への転換がほぼ完成されたのである。よりいっそう喜ばしいことに、ここ数年、国内外を問わず、学術誌で掲載された現代マルクス経済学の研究で、数理論理体系の叙述法と研究方法を生かして書かれた論文は、ますます多く見られるようになった。一部の学者は、長期にわたって、現代政治経済学の数理論理学の創新と発展に力を入れてきた。彼らは数理論理をもって現代マルクス経済学体系の理論モデルを表現し構築しようと試み、現代マルクス経済学の創新、発展と完成に絶えず力を捧げてきた。

白暴力教授はその代表作の一つである『価格の直接基礎または価値の転換形式を論ずる』という本の中で、十分な理論と厳格な数学の方程式を用いて、スティードマンやサミュエルソンらが「価値の転換問題」をもって労働価値説を否定していることを批判し、「価値の転換」に関するマルクスの理論が完全であることを、説得力をもって論証した。広く数学的方法を利用しているため、「価値の生産価格への転化に関するマルクス理論の完全性を論証し、転換という世界的に有名な経済学の課題研究において、新たな突破口を開いた」。「理論研究のなかで、微分学と行列代数の方法を導入したため、わが国の政治経済学関係諸著書の中で、新しい風格を樹立した」、「数理経済学的風格を備えたわが国における最初の政治経済学の専門書」だと見られている。この本はまさにわが国の価値転換説研究において、シンボル的な意義をもった学術的成果と言えるし、マルクス経済学の数学的建設を積極的に推進する上での、

注目すべき成果と言える。そして、白暴力教授は別の代表作『価値価格通論』の中で、マルクスの労働価値説に基づき、六つの次元から構成される価値価格理論体系を打ち出した。すなわち、労働価値説を基礎に置いて、均衡分析と微分学といった方法によって、変数労働価値説を構築し、製品の量的変化によって労働消費量、価値量と交換価値量が変化する状況を考察し、さらに市場価格の動きを分析した。丁堡駿教授の代表作『マルクスの労働価値説と現代の現実』はマルクスの労働価値説を堅持し発展させることを主たる特徴としている。著書はそれぞれ価値の創造、価値の実現、価値の分配といった方面から、マルクスの労働価値説について、創造的な探求と研究を行ない、画期的な研究成果を出している。馮金華氏は『一般均衡理論の価値基礎』という論文の中で、マルクスの労働価値説を用いて西側経済学の一般均衡理論を解釈しようと試みた[17]。

テキストに基づく論理分析と数学的論理分析とがそれぞれに長所と短所を持っていることは、否定できない。それぞれの長所は、相手の短所であるため、両者の間には強い補完性が存在する。一概に切り離したり対立させたりすることは無益である。さらに、数学の論理と経済学の論理を総合的に分析して分かるように、両者には重なるところがあるものの、同一の関係ではない。演繹法の視点から見れば、数学の論理と経済学の論理は内的整合性の需要を満たしているが、数学の論理が強調しているのは数理の論理である。その一方、経済学の論理が強調しているのは弁証の論理である。われわれがより明確に知っておくべきことがある。一部の数理派経済学者が偏って議論しているように、経済学は「数学化」してこそ科学となる、というが如きには決してならない。数学という道具自体、理論を作り出すことができない、理論を生き生きと、また直観的に表現するための、あるいは数量的に表現するための可能な方法を提供しているだけだからである。

（本稿は中央大学経済研究所公開研究会で発表、報告したものである。）

[17] 馮金華「一般均衡理論の価値基礎」、『経済研究』所収、2012 年 1 月号。